

島少年団の団長を任された。しかし一年活動後憲兵隊に目をつけられ解散させられた。『天の涯に生くるとも』(八三年)李元寿イウォンスは二五年に馬山の新化少年会の創立委員になった。方定煥も来訪したりで活発に活動していたが、新聞記者であった指導者が逮捕され解散に追い込まれた。かれは解放後に少年小説『五月のうた』(五三)を書き、活動のようす、友情の問題、解散という緊迫事態を体験者たちの目線メソで生き生きとえがいた。

姜信子カンシンギの『日韓音楽ノート』を読んでいてあっと声をあげた。「他郷暮らし」「木浦の涙」の作曲家として名高い孫牧人モギンが、少年会で童謡を習ったことがあったというのだ。さっそく自伝に当たると、かれはソウルの斎洞普通学校にかよい翠雲洞少年会に属し、童謡をうたうことが大好きだった。また月に一度の方定煥の童謡の口演を聞きに天道教会館にも出かけたとある。『他郷暮らし』

三人が人生の初期に民族の噴出の影響をしっかりと受けたことだけは確実だ。

・封殺される少年運動

朝鮮総督府は社会主義や民族主義などの考え方を「不穩」その持ち主を「不逞鮮人」とよんで徹底的に警戒弾圧した。集会は併合当初から「集会取締令」によって警察への届け出を義務づけられ童話大会にまで警官が臨席した。「注意!」という声三回で中止を命じられた。この取締令は明治の自

由民権運動を弾圧した集会条例の植民地バージョンだった。普通学校(朝鮮人子弟のかよう小学校)の日本人校長は「少年会に入れば退学させる」と児童を脅しつづけた。少年少女雑誌の場合も「○行削除」や原稿押収、発行不許可がしばしば見られる。その理由はふつう明かされることはなかったが、民族意識を鼓吹したといった理由だろうと思われる。

ついでにいえば、方定煥バンジョンフがはじめたことで名高いオリニナル(子どもの日)も規制・弾圧された。それは噴出可能性のない総督府製児童愛護デー(無料健康診断・興業観覧など)におきかえられ、戦争末期にはそれさえも海軍記念日になり、オリニナルは解放後にやっと復活した。児童文学への弾圧の例は枚挙にいとまがないので、拙編訳『韓国・朝鮮児童文学評論集』(九七) 第Ⅱ部の「作家と時代」を参照いただきたい。

思えば、方定煥バンジョンフや李元寿イウォンスや李周洪イジュホらは民族の子らと文学を愛した「罪」で拘束されたり獄につながりしたが、ひるがえって同じく民族の子らと文学を愛した巖谷小波や鈴木三重吉や小川未明らは一度も拘束・投獄されたことはなかったし、プロレタリア系をのぞき児童雑誌が各種処分を受けたこともなかった。つまり彼我の近代児童文学確立のまえに立ちはだかった試練たるや質量ともに天地の差だったのだ。